

地塩

No.413 2018. 12. 23

目次

発行日 2018. 12. 23
 創刊 1926. 9. 10
 編集 蕃山町教会執事会
 発行人
 印刷人 山陽印刷(株)
 発行所
 岡山市北区蕃山町2-15
 日本基督教団蕃山町教会
 TEL = (086)224-1322
 FAX = (086)224-1329
 三井住友銀行岡山支店
 口座 普通 0962358

礼拝説教 2018. 10. 14

「神は何でもできる」

マタイによる福音書一九章二三〜三〇節

牧師服部 修

息子が幼稚園の頃、園の友だちが教会学校の礼拝に来るようになりました。目的は、礼拝に来る、というよりも、遊びに来るついでに礼拝に出る、という感じでしたが、理由はどうであれ、礼拝に来るのは良いことですから、喜んで迎え入れておりました。神さまを礼拝するために人が造られた、という聖書の教えに基づいて言えば、どんな理由であれ礼拝に来るのは良いことです。今でも大歓迎です。こんな動機で教会に来て良いのだろうか、ということをお心配されている方がおられるとしたら、心配しないでください。

少し話がそれましたが、先ほど紹介した息子の友だちが礼拝に出ていたときに、今日の箇所が読まれたことがあります。すると彼はおもわず「エーッ！」と驚きの声をあげました。彼はきつと「らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」と聞いて、頭の中でその様子をイメージしたのでしょう。

このような驚くべき言葉がイエスさまの口から出てきたのは、直前の青年との会話があったからです。この青年との会話は、神を選ぶか富を選ぶか、という選択が目の前にあったときに、神を選びきれない人間の弱さを明らかにしました。それが「はつきり言って

おく。金持ちが天の国に入るのは難しい。重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」という言葉となった。

ただ私たちはここでイエスさまが本当に伝えようとしたことを間違わないようにしなければなりません。これは、金持ちは天の国に入ることができず、貧しい者が天の国に入れる、ということをお伝えるものではありません。イエスさまが対話していた相手が異なれば、当然イエスさまの言葉も変わります。

例えば、訪ねてきた人が、学や知識を誇る人だったら、イエスさまはこう言われるでしょう。「もし完全になりたいのなら、行って学んだことをすべて忘れ、書物を手放し、学校も学ぶことも辞め、愚かな者になりなさい。そうすれば…」。

例えば、訪ねてきた人が、仕事を誇る人だったらイエスさまはこう言われるでしょう。「もし完全になりたいのなら、行って仕事を辞め、ただ誰かから恵んでもらわなければならぬ者になりなさい。そうすれば…」。

例えば、訪ねてきた人が、自分の能力を誇る人だったら、イエスさまはこう言われるでしょう。「もし完全になりたいのなら、行ってその能力で出来ることをすべて辞め、何もできない者になりなさい。そうすれば…」。

例えば、訪ねてきた人が、地位や名誉を誇る人であっても、家族を誇る人であっても、あるいは何もないことを誇る人であっても、同じことが言えます。私たち人間はいつも、「神と何か」の対比の中で、揺れ動きながら生きていく罪人でしかないので。ですからここでは「金持ちが」となっていますが、この言葉は先の例のように、「地位のある者が」、「知恵にうぬぼれる者が」、「体力に自信のある者が」、「不幸を自慢する者が」のように、さまざまな言葉に置き換えることができます。

だからこそイエスさまの言葉に、誰もが驚き、弟子たちも「それでは、だれが救われるのだろうか」と問うたのです。

考えて見れば、弟子たちのほとんどは「金持ち」とは呼べない者たちです。そうであれば、天の国に入れないのが金持ち限定なら、「貧しい漁師出身の俺たちは救われる！」と言えたわけですが、そうは言わなかった。彼らは金持ちではなかったけれど、彼らなりに天の国に入ることの難しさを痛感したわけでは

天の国に入ることの難しさを痛感するのは、天の国を自分の力で勝ち取るう、という心が私たちの中にあるからです。それは言い方を変えれば、天の国に入るか入らないかを決めるのは自分だと考えている罪、と言えます。まるで外国に旅行にでも行くようなイメージで、これなら行ける、とか、行

けない、とか、そもそも行く必要性を感じるか感じないか、という感覚に天の国を引きずりおろしてしまっている。そういった感覚があるから「金持ちが神の国に入るよりも、…」と言われて、「それでは、だれが救われるのだらうか」と言わざるを得なかったのです。いや、もっと言えば、私たちは誰もが、「それでは、誰が…」という問いを持って立たなければならぬ存在であることに気付かされるのです。事実、天の国の確実な証拠は私たちの側には何一つありません。だから、誰が救われるのか、私は救われるのか、私は救われて良いのか、そんな言葉が頭の中を駆け巡ることになります。

これがあれば大丈夫、というものを先の青年も求めていました。掟を守り、忠実に、誠実に、一生懸命生きてきました。「そのあなたの頑張りが、あなたの永遠の命、天の国の保証となります」とイエスさまから告げられたとしたら、彼は幸せだったことでしょう。しかし違いました。私たちも何らかの保証を求めます。自分がしてきたことに保証を求めます。そして「よく頑張ったね。ご褒美に天の国に入りなさい」というお褒めの言葉を望むのです。けれども、イエスさまはそのすべてを否定されました。私たちはその現実に対して、やはり私は救われないのか、とか、それでは誰が救われるのだらうか、だれも救われないではないか、と考え、ある意味、がっかりします。弟子たちも気落ちしていたのかも知れません。誰が救われるだらう。そう

子たちを、イエスさまは良く見つめてくださった。そしてこう言われたのです。「それは人間にできることではないが、神は何でもできる」。あなたは自分の頑張りで天の国に入れないと嘆いているけれど、神さまにはできますよ、と告げてくださった。

私たちは日々の努力の積み重ねの先に天の国があると考えている。でもそのようにして天の国に入ろうとするなら、それはらくだが針の穴を通るよりもまだ難しい、つまり無理なことだ、と言われた。だからあなたは天の国の保証を自分に求めるのではなく、「神は何でもできる」という約束に置くべきなのだ、と告げられた。「神は何でもできる」のだから、この神においては救えない人は一人もない。赦せない罪は無い。私たちは、それゆえに、どれほど自分のことについて、天の国に入ることに、救われることについて確証が無かったとしても、神は何でもできるという約束にすべてを委ねることができのです。それこそ私のすべてがイエスさまによって否定されたのは、私が自分で天の国に入ろうとし、救いを勝ち取ろうとしていたことに対しての否定、つまり、それでは救われない、というイエスさまの厳しくも愛に溢れた言葉であったことに気付くのです。私たちの救いの根拠は「神は何でもできる」にのみあるのです。

これを聞いたペトロは、「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従ってまいりました。では、わたしたちは何をいただけなのでしょうか」と言います。確かに一二人の弟子

たちはすべてを捨てて従いました。それは当然のごとく報われるべきことです。すから、イエスさまも報いを約束されます。その上で「しかし」と言われます。それは「捨てた」ことを自慢しないように諭します。それは、捨てることのできた自惚れは、捨てない人、捨てられない人への裁きの言葉を生み出すからです。その点からも「先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる」というイエスさまの言葉は、私たちがどこまでも「神は何でもできる」という点に信頼するように促します。

更に言えば、神は何でもできるお方であるがゆえに、私たちを罪から救うためにイエスさまを十字架の上に死に渡し、死者の中から復活させたお方であることも知らされています。あなたを救うためには何でもする、という愛の約束が十字架と復活に示されているからこそ、私たちは自分の側に根拠を、保証を求めていた罪を悔い改め、全てをあなたに委ねます、と応答するのは、この応答の中に、らくだが針の穴を通るより難しい天の国の扉が大きく、確かに、私の前に開かれるのです。主の十字架と復活によって、針の穴よりもまだ狭く、いや全く閉ざされていた死が打ち破られたのだ、と喜ぶことができます。

それゆえに、神は何でもできるとの約束に信頼して歩みたいのです。どんなに小さな歩みでも受け入れ、全ての歩みを恵みと希望へと変えてくださる神さまの憐れみを信じて生きる者でありたいのです。